+博論書式 3(論博書式 3)

2023 年 1 月 13 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	理学療法学分野
学籍番号	20S3004	院生氏名	秋山　和也
通学キャンパス	成田キャンパス		
論　文　題　目	術後の身体活動量が下肢整形外科術後高齢患者のボトムアップ注意に与える影響		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

＜審査結果の要旨＞

1)　主論文について

本研究は、高齢者の術後に発生する認知機能障害の徴候として注意機能の変化に着目した。股あるいは膝関節人工関節全置換術を受けた 65 歳以上の高齢症例を対象として、術後の身体活動量の多寡が注意機能の経過に与える影響を明らかにした。術後の身体活動量をもとに群分けを実施し、Posner 課題反応時間の経時的変化を検討した。その結果、高身体活動量群に比べ、低身体活動量群では、術後 14 日目の右不一致条件、術後 7 日目と 14 日目の左不一致条件が有意に高値となった。Mini Mental State Examination では全ての同時期検査において有意差を認めなかった。これらのことより、股あるいは膝関節人工関節全置換術を受けた高齢症例において、術後の身体活動量が低い症例に比べ、術後の身体活動量が高い症例は注意機能の低下が少ないことを明らかにした。本研究の新規性は、身体活動量の向上が術後認知機能障害の予防・改善において有益な理学療法介入となる可能性があることを示唆した点であり、有益と認められた。

本研究プロトコルは、倫理審査委員会の承認を受け（承認番号：20-Io-182-2)、全ての症例から事前に本研究の目的と方法、利益・不利益に関する内容を口頭および書面を用いて十分に説明されており、倫理的問題を含めてその遂行方法に特に問題はないものと判断された。

なお、副論文の内容についても、特に問題はみられなかった。

2)　審査および口頭試問について

2022 年 12 月 5 日(月)に遠隔システムを利用して審査会を開催した。論文の構成、術後に発生する認知機能障害の背景要因に関する記述、目的の整合性、対象者の選定、変数の尺度水準に応じた処理方法、図表の提示方法などに関して、多くの指摘事項が存在した。12 月 19 日(月)に 1 回目の修正論文が提出され、見直された論文の構成を確認した。修正の不十分さが残存したため 2 回目の修正を求めた。1 月 3 日(火)に 2 回目の修正論文が提出され、細部の修正を経て、1 月 9 日(月)に 3 回目の修正論文が提出された。修正を重ねるごとに適切な一貫性のある内容となった。

3)　合否

以上の結果から、審査会の審査員全員が、本論文が著者に博士（保健医療学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。

論文審査担当者	主　査　　久保　晃
	副　査　　倉智　雅子
	副　査　　小野寺　敦志